

身近な地域における自然体験活動にみる幼保小の共通性

ーキトウシの森での「森のようちえん」と小学校「生活科」の実践を通してー

得居 千照

I. はじめに

2022 年、幼保小の架け橋期の教育の充実を図り、一人ひとりの多様性に配慮した上ですべての子どもに学びや生活の基盤を育むため「幼保小の架け橋プログラム」が示された（中央教育審議会初等中等教育分科会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」，2022）。これまでも幼保小の連携は重視され続けてきたが、「幼保小の架け橋プログラム」においては幼保小連携の成果と課題を踏まえたねらいが設定されている。

小林（2023）は、「幼保小の架け橋プログラム」のねらいを受け、「そもそも指導や改善の前提となる十分な情報を持ち合わせていない」（小林 2023, p.56）とし、理科を学ぶ小学 3～6 年生への質問紙調査を実施し、幼少期における自然体験活動の具体的な内容等を明らかにしている。今後、「幼保小の架け橋プログラム」が示す「データに基づくカリキュラム・教育方法の改善を促進」するためにも、小林（2023）の指摘の通り、まずは自然体験活動の実態を明らかにしていくことが求められている。

また、「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」には幼保小連携の課題として「施設類型の違いを越えた共通性が見えにくい」こと、また、「アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムがバラバラに策定され、理念が共通していない」点が挙げられている。

以上、小林（2023）の自然体験活動の実態の把握に関する問題意識、および、幼保小の共通性が見えにくいという課題を踏まえ、本稿の目的を、身近な地域における自然体験活動にみる幼保小の共通性を明らかにすることとする。

幼保小の自然体験活動の共通性を明らかにする際、同じ自然環境を対象とした実践を比較することにより、両者の共通性を把握しやすくなることが考えられる。そこで本稿では、同じ自然環境を身近な地域として有する、森のようちえん「キトウシこどもの森（以下、キトキト）」、および、東川町立東川第二小学校（以下、東川第二小学校）の「生活科」を対象に、北海道上川郡東川町「キトウシの森」での自然体験活動

を分析する。

「森のようちえん」と小学校の関わりについての先行研究の一例として、柳原(2020)は、幼児の行動や言動の観察を通して、「森のようちえん」での経験が、「生活科」で重視される「自然への気付き」へと関わっていくことを指摘している。また、木戸(2017)は、保護者と保育者に対しアンケート調査を実施し、就学についての共通認識や、その差異を明らかにしている。しかしながら、木戸(2017)が指摘する通り、「森のようちえん」にかんする幼保小接続過程に焦点を当てた研究は少なく、課題とされている。

本稿の目的を明らかにするため、次の手順により検討を進める。第一に、本稿の調査対象地である東川町と「キトウシの森」について、東川町の概要と「キトウシの森」の成り立ちを明らかにする(Ⅱ)。第二に、東川町の幼児教育の概要と「キトウシの森」での取り組みを明らかにする(Ⅲ)。第三に、「キトウシの森」における「キトキト」の取り組みを明らかにする(Ⅳ)。第四に、「キトウシの森」における東川第二小学校の取り組みを明らかにする(Ⅴ)。以上を踏まえ、自然体験活動を行う子どもとの関わり方にみる共通性を検討し(Ⅵ)、結論とする。なお、本稿では、「キトキト」および東川第二小学校「生活科」の実践観察に加え、聞き取り調査と質問紙調査を実施した。本稿が分析対象とするのは、次の調査協力者の回答の結果である。キトキト卒園児 A・B(質問紙)、保育士 A～C(質問紙)、保育士 D・E(聞き取り)、保護者 A～C(質問紙)、東川第二小学校の児童(3年生 5 名、4 年生 7 名、5 年生 4 名、未記入 1 名、質問紙)、教員 A(聞き取り)、教員 B(質問紙)である。紙幅の都合上すべての回答を提示することはできないが、適宜、調査の回答を提示しながら、分析を進める。

Ⅱ. 東川町と「キトウシの森」

1. 東川町の概要

ここでは、本稿の分析対象である「キトキト」および東川第二小学校の「生活科」での実践が行われる「キトウシの森」を含む東川町の概要を明らかにする。

東川町は、北海道のほぼ中央に位置し、東部は山岳地帯で大規模な森林地域を形成し、日本最大の自然公園「大雪山国立公園」区域の一部となっている。北海道の峰といわれる大雪山連峰の最高峰旭岳(2,290m)は、東川町に所在し、豊かな森林資源と、優れた自然の景観は、観光資源として高く評価されている(東川町史編纂委員会編, 1995)。北西部は、岐登牛山系の丘陵地帯と、倉沼川が東西に流れ、西部平坦地は、肥沃な大地と水利に恵まれた水田地帯である(東川町史編纂委員会編, 1995)。行政上は上川支庁管内に所属し、東は上川町、西と北は旭川市、南は美瑛町・東神楽町と、それぞれ境界をなす(東川町史編纂委員会編, 1995)。

2. 「キトウシの森」の成り立ち

東川町の北側に位置する「キトウシの森」はキトウシ山(岐登牛山)(標高 457m)

一帯の自然を生かした公園として整備されている。「キトウシの森」はこれまで、「キトウシ森林公園家族旅行村」という名称で親しまれてきたが、2023年に名称が変更されている（東川振興公社，2023）。東川町史編纂委員会編（1995）によると、キトウシ山の開発は、1969年から1972年までに、60haの用地を取得して、スキー場と自然公園づくりが始まり、1973年12月にキトウシ国際スキー場（現在のキャンモアスキービレッジ）、1974年9月には、隣接して西側にグリーンゴルフ場がオープンされた。また、1974年にはキトウシ展望閣（360m）が建設され、1975年頃からは、本格的な森林公園としての整備が進められた。1989年には、キトウシ家族旅行村の開村式を挙げるに至っている。1989年に開村された「東川町キトウシ家族旅行村」の目的は「恵まれた豊かな自然の中で、家族を中心に健全で手軽に楽しめる観光レクリエーションの場を提供し、あわせて観光事業の振興と地域文化及び経済の発展に寄与する」（東川町史編纂委員会編 1995，p.477）ことであった。

キトウシの森には、物産センターやケビン、ふるさと生活体験の家（大正の家）や、キャンプ場、情報センター、ジャブジャブ池、中央芝生広場、ゴーカート、ポニー牧場、展望閣、温浴施設きとろん、キトウシパークゴルフ場（4コース全36ホール）、キャンモアスキービレッジなどがある。これらキトウシ森林公園に整備されている各種施設は、1980年に誕生した「東川振興公社」によって管理運営がなされている（東川町郷土史編集委員会編，1994）。

Ⅲ. 東川町の幼児教育の概要と「キトウシの森」での取り組み

東川町の幼児教育の始まりは、昭和30年代から設立された各保育所（厚生省管轄）にある（東川町郷土史編集委員会編，1994）とされ、1978年には東川町立東川幼稚園が開園されている。2002年12月には、東川町の4つの保育所（東川町立中央保育園、東川町立リリー保育所、東川町立なかよし保育所、東川町立北立保育所）に東川町立東川保育園を加えた5つの施設を1ヶ所に統合した、東川町立幼児センター（ももんがの家）が開園し、2003年11月には北海道で初めて、国の構造改革特区（幼保一元化特区）に認定されている（写真文化首都「写真の町」東川町編，2019）。

2024年1月現在、東川町の幼児教育機関は、東川町立幼児センター（ももんがの家）、キトウシこどもの森（キトキト）、東川こまくさ保育園の3つである。本稿では、「キトキト」の取り組みに着目するが、他の施設においても「キトウシの森」での自然体験活動が行われている。東川町立幼児センターでは、フィンランドの保育形態を参考に、就学前の基礎教育（プレスクール）を導入し、年間を通しての「外遊び」や「異年齢交流」などを積極的に展開し、遊びの中で子どもたちに社会性が身に付くような取り組みがなされている（教育委員会，2016）。特に5歳児は「小1プロブレム」といわれる就学時の段差を越える力を身に付けられるよう、地域の人材や場所を活用

した「プレスクール事業」に取り組んでおり、その一つの体験活動に NPO 法人大雪山自然学校のガイドによる「キトウシの森」での「四季の自然体験」が含まれている（教育委員会，2016）。

NPO 法人大雪山自然学校は、子どもを対象とした環境教育、旅行者を対象としたエコツアー、それらを実施する人材育成を主な事業とし 2001 年より活動を開始している（荒井，2016）。2009 年から東川振興公社と共同で「誰もがができる森づくり」をコンセプトに「キトウシの森」での森づくりを行っており（荒井，2016），このあと取り上げる「キトキト」の設置もこの NPO 法人大雪山自然学校である。

IV. 「キトウシの森」における「キトウシこどもの森（キトキト）」の取り組み

1. 「キトウシこどもの森（キトキト）」の概要と保育の特徴

ここでは、キトウシこどもの森（2023）をもとに、「キトキト」の概要と保育の特徴を明らかにする。「キトキト」の前身は、2016 年に有志の母親たちによってスタートした自主保育「キトウシ森のようちえん」にある。当初は園児 2 名であった。「自然の中で子育てしたい」「子ども時代を自然の中で過ごしのびのび育てほしい」という想いに賛同する親子が少しずつ増えたこともあり、2018 年より NPO 法人大雪山自然学校のサポートを受けながら運営をおこなっている。「キトウシの森」の敷地内に園舎が建設され、「キトウシこどもの森」に名称を変更し、企業主導型保育事業での保育がおこなわれている（キトウシこどもの森，2023）。「キトキト」とは「キトウシこどもの森」の通称である。東川町の開拓には富山県からの移住者も多く、「キトウシの森」の東側には富山神社がある。保育士への聞き取りによれば、「キトキト」とは、富山の方言で「生き生きとした」「新鮮な」という意味はあり、ここから付けられたという。2020 年度からは定員が 12 名となり、3～5 歳児の幼児が「キトキト」での時間を過ごしている。また、0～2 歳児の親子を対象とした森のようちえん体験プログラムとして「てくてく 森のようちえん体験」も年に数回実施されており、乳幼児期の子どもが「キトウシの森」で過ごす機会も設けられている。

次に、キトウシこどもの森（2023）をもとに、「キトキト」の保育の特徴を「あそぶ」「たべる」「くらす」という 3 つの視点から概観する。

まず、「あそぶ」についてである。「キトキト」では、「キトウシの森」の豊かな自然の中で「森のようちえん」の考え方を軸とした野外中心の活動が行われている。その際、「自然の中で子どもも大人も育ち合うこと。自然の営みに合わせ、自然の中でいっぱい遊ぶこと。自然の中でたくさんの不思議やいのちと出会い、自分もその一員であると感じること。子どもの力を信じ、子ども自身で考え行動できる場であること。大人が決めた保育内容ではなく、その瞬間に「やってみたい」という一人ひとりの気持ちを大切に」（キトウシこどもの森 2023, p.5）されており、朝の「おはようの会」（観

察時、子どもと保育士は「朝の会」という呼び方をしていたため、以下では「朝の会」と表記する）では、みんなの「気持ち」を聞くことから始まっている。

次に、「たべる」では、「森の中で元気に遊べる体づくり」が大切にされている。東川のきれいな水で育った、無農薬・有機の地元野菜やお米を中心にバランスを考えたメニュー作りが行われており、夏には、園舎の横にある畑で子どもたちと種から育てた野菜を収穫し、食べる、という活動も大切にされている。

最後に、「くらす」では、「キトウシの森で子どもも大人も、毎日たのしくやりたいことに真剣であり、暮らすには一人ひとりが自分の身の回りのことができることも大切なこと」（キトウシこどもの森 2023, p.5）とされている。自らの着替えなどが入った自分のリュックを背負って登園している様子からも、自分の身の回りのことを自分でできるようになるよう、意識的に取り組まれていることがわかる。

また、「キトウシの森」で、子どもたちが気付いたことや見つけたことなど、春夏秋冬の発見を NPO 法人大雪山自然学校（2022）などのリーフレットとして作成し、「キトウシの森」を訪れた人に無料で配布されている。「キトキト」の園児たちも「誰もができる森づくり」（荒井, 2016）の一員として加わっていることがうかがえる。

2. 保護者と保育士からみた「キトウシこどもの森」での保育を選択する理由と期待

「キトキト」での保育を支える保護者および保育士が、「森のようちえん」の考え方を中心とした保育を選択する理由（第1表）および子どもたちに期待していること（第2表）について、聞き取りと質問紙調査の回答から明らかにする。

第1表および第2表の通り、保護者と保育士はともに、自然の中で過ごすことにそれぞれの意味を見出している。自然環境の中で出会うことに対し、自分で自分の行動を考えながら、周りの声に耳を傾けること、思い切り遊ぶことが重視され、子どもの想像力や主体性が育まれていくことが期待されていることがわかる。では実際に、「キトキト」ではどのような実践が行われているのか。筆者のフィールドノートと保育士への聞き取り調査および質問紙調査の結果からその様子の一部を次項で記述する。

第1表 保護者と保育士からみた「キトキト」での保育を選択する理由の回答

保護者 A	幼少期に自由な発想のもとに思う存分遊ぶ体験がその後の生きる力に繋がっていくという子育て観を持っているので、豊かな自然の中で小集団で展開される遊びを見守っていただけのキトキトの環境は理想的だと感じたから。
保護者 B	自主保育や自然保育に興味があったから
保護者 C	野外で思いっきり遊んでほしい、やりたい事をとことんやってほしいという事から
保育士 A	自然の中で様々考えていくことに価値があると思っているから。
保育士 C	子どもたちと野外で思いっきり遊びたい、見守る保育を信じているので。
保育士 D	自然の中だと、どうにもならないことがいっぱいあったりして、この毎日同じ場所でも違う景色になったりとか、同じ気温で自分たちが服装もどうにかしなきゃいけないかったりとかして、やっぱり必然的に考えなきゃいけない状況になってて、それがやっぱり大人もそうだし、子どももそうだし、みんなでどうしよかって毎日できるところが、なんか

	すごい素敵だなと思って。それがきっとみんなの生きる力につながっていくなと思って、この自然での活動を重視した保育をやっているんだなと思っています。
保育士 E	やっぱり自然の方がその作られた大人が与えたものでもないし。本当に自然は人を選ばない。みんなを受け止めてくれる。たとえば、2 歳児の子が同じ場所にいても花を摘む子がいたら、3 歳児の子がおままごとに使っていて、4 歳児の子は数が数えられるから枚数を数えたりとか、5 歳児になったらそれを図鑑で調べて、字が読めるようになって。大人は「すごい気持ち～」とか体操したりとか。で、おままごとで使った色水で染物ができたりとか。本当にその人に必要なものが自然から得られる。同じ場所で同じことでも。そういった意味ではやっぱり自然が一番、学びの場として最適だなって。主体的に選べるので。おもちゃとして与えられる、「何歳のおもちゃですよ」って与えられるのではなく、主体的に自分が必要なものを選んでいけるっていうのは主体性を伸ばす場所としては、森が一番かなというふうに。なので、やっぱり森の自然体験活動をやりたいってずっと思ってここに来ました。

(聞き取り調査および質問紙調査の回答から筆者作成)

第2表 保護者と保育士からみた「キトキト」での保育を通した子どもへの期待

保護者 A	キトキトでは石や木、水たまりなど周囲にあるものを生きているもの(動物や人間など)に見立ててお友達とごっこ遊びを展開したり、物語を紡ぎ出す様子がよく見受けられます。キトキトでの遊びを通じて豊かな想像力を養ってほしいと期待しています。お友達との関わりを通じて、自分とは意見が違う子がいることを受け止めたり、相手に伝わるように意見を言えるようになってほしいと思っています。
保護者 B	四季を体で感じ、自然の流れのなかで自分らしくのびのびと、仲間とともに楽しく過ごしてほしい
保護者 C	自分の好きを見つけてほしい、自分を出せるようになってほしい
保育士 A	生きる力を身につけて、自分らしく過ごしてほしい。
保育士 B	自分で考えて行動すること
保育士 C	自分を素直に表現でき、周りの声に耳を傾けるようになればいいな。思い切り遊んでほしい。
保育士 D	今ある力はきっと大事な力なので、そのまま伸びていってほしいなっていうのがあるのと。ここでいっぱい考えたこととか、伝えたこととか、知ったこととかを、自分らしく、使って、生きる力として。本当彼ら、彼女らしく人生を歩んでいってほしいなと思います。いっぱい考えたし、いっぱい伝えたし、それはもう本当に大きな力だと思うので、それをどんどん生かしていってほしいなと思います。
保育士 E	自然は人を選ばないって話をしたと思うんですけど、やっぱり主体的な部分を、養う力を自然は持っているの。主体性を養っていくうえで、大人になったときも、それがたぶん生きる力に変わっていく。なにか困難が起きたときにも。本当、自然はもう私たちはどうしようもできないので。どうしようもないことに会える体験というのは、絶対に将来にとって大事だと思うんですね。

(聞き取り調査および質問紙調査の回答から筆者作成)

3. 「キトウシこどもの森」における「キトウシの森」での実践概要

先述の通り、「キトキト」園舎は「キトウシの森」の敷地内にあり、子どもと大人は園舎よりも森の中で多くの時間を過ごす。それは、雨天であっても同じであり、雨合羽を着用し、自然の中で活動する。

キトウシこどもの森(2023)に示された1日の目安は次の通りであるが、その日の

活動は、大人が決めるのではなく、「朝の会」での子どものやりたいことや、その時その時の子どもの「やりたい」気持ちが大切にされるため、以下は、一応の目安ではない。まず、8時に開園、子どもたちは保護者とともに随時登園し、子どもが自らが背負ってきたリュックをかけたり、コップを置いたり、身支度などをし、朝の準備をおこなう。その後、9時15分頃から「朝の会」を行い、子どもも大人も切株の椅子に輪になって座り、子どもが選んだ絵本を読んだり、今日のお知らせや「今日自分がやりたいこと」などを共有する時間を過ごす。9時30分頃からは、各々活動を開始する。12時に昼食、昼食後に午睡をし、午後の活動を行う。15時に「またあしたの会」と「おやつ」があり、順にお迎え、降園となる。延長保育にも対応し、18時に閉園となる。第3表は、筆者が観察をした2023年9月28日の「朝の会」の様子である。子どもと大人は園舎の裏側から木々が繁る森に入り、丸く並べられた小さな丸太の上に一人ひとり腰かける。この日は、保護者による読み聞かせからはじまった。ここからも、「キトキト」では、保護者と保育士の垣根がなく、保護者も一緒に森の中での保育に関わることでできる関係性や環境が築かれていることがわかる。この日の「朝の会」は、保護者の読み聞かせも含めると約28分間行われており、子どもたちの気持ちにゆっくりとした時間の中で耳を傾けていることがわかる。

第3表 2023年9月28日の「朝の会」の様子

子どもの様子	大人の様子
「今日はこれを読みま〜す」と絵本を見せ、みんなでおはよう」とあいさつしたあと、保護者による読み聞かせを聞く	子どもが読みたいと持ってきた絵本2冊『たぶの里』『まんじゅうこわい』を保護者が読み聞かせ
『まんじゅうこわい』から、まんじゅう食べたい、あんこ、などの話をしている	保育士が座ったままボードを持ち、子どもの声を聴きながら、静かになるまで待っている
当番の年長児が今日の日付やお休みの子、給食の担当の名前を確認する。その後、一人ひとりの名前を呼び、呼ばれたら「はい」と応答している	名前を呼ばれた保育士は「はい」と応答している
ボードに書かれた「おしらせ」（きのうのくれーぶやさんごっこ、ゆーちゅーぶごっこ、たのしかったね!）を読み上げる	
「おとなからある人」と声をかけ、保育士が「はい」と手を挙げると「どーぞ」と指名している	保育士が「見に来ている人がいること」などをお知らせとして共有していた。「おとなからはおしまいです。お返します」と当番の子に返す。
子ども一人ひとりが今日やりたいことを発表していく。「工作したいです」「今日はA児とB児と遊びたいです」などと発表し、話終わると次の子を指名し、全員が発表するまで続ける。発表できない子には「なにしたい？」など声をかけていた。	保育士や保護者は、子どもが話しやすいような雰囲気を作りながら、子どもが話し始めるのをじっと待ち、話している子どもの言葉を聞いている。
当番の子が「きょうもよろしくね〜」と言い、それぞれの活動をはじめる	当番の子に合わせ「よろしくね〜」とあいさつをした（保護者はこの後に森を離れて行った）

（「キトキト」での観察をもとに筆者作成）



写真1 お絵描きをして遊ぶ園児の様子
(2023年9月28日 筆者撮影)



写真2 キトウシの森で過ごす子どもと大人
(2023年9月28日 筆者撮影)

第3表からもわかる通り、「朝の会」も子ども主導で行われており、保育士や保護者は「子どもたちのやりたいこと」を聞き、サポートする姿勢が徹底されていた。「朝の会」の後、子どもが「下にくだもの取りに行く～」と保育士に言い、「あ～OK、まず行こうか、じゃあ」と応答し、トイレに行く子や段ボールを取りに行きたい子とともに園舎に戻った。その後すぐに、子どもたちは園舎から自分が使いたいものを両手いっぱい抱え、森の中に戻り、それぞれの活動をはじめた。この日、子どもたちはそれぞれ、シートを広げ、ゆーちゅーぶごっこ・おめんづくり・さめのおりがみ(写真1)をしたり、枝にひもをぶら下げたり、どんぐりや葉っぱを用いてごはんやさんをするなど、子どもたちが自然とのかかわりの中で、主体的に自然物への自分なりの見方を発見し、遊びに取り入れてた。また、森の中で一人ひとりがやりたいことをしながらも、相互に話したり、関わり合って過ごしたりしている様子がみられた(写真2)。また先述の通り、森での活動は、子どものやりたいことによって決められ、保育士はその活動に対し必要以上の手助けをしていない。子どものやりたいことがどのようにしたら実現することができるのか、その都度、子どもとともに話し合いながら自然の中で活動している様子がみられた。

4. 卒園児からみた「キトウシこどもの森」での経験

「キトウシの森」および「キトキト」で過ごした卒園児はキトウシでの経験をどのように感じているのだろうか。小学3年生以上の卒園児への質問調査を実施し、卒園児2名の回答を得ることができた。まず、「キトキトでの生活の中で楽しかったことや印象に残っていること」については、「馬のお世話」(卒園児A)、「外遊び」(卒園児B)と回答している。「キトキトでの生活をふりかえり、キトキトで過ごせてよかったこと」としては、「園舎の中でなく森の中で遊べたことがよかった」(卒園児A)、「みんなと

一緒にごっこ遊びをしていました。(鬼ごっこ、おままごと)」(卒園児 B) と回答している。さらに、「キトウシの森での活動を通して気付いたこと」として「自然について(森とか、自然のことが身に着いたよ。)」(卒園児 B) との回答を得た。「キトウシの森の好きなところ」としては、「風景」(卒園児 A)、「池や自然 理由遊んでいると新たなことを見つけることができたから」(卒園児 B) と回答しているように、園舎ではなく森の中で過ごすや遊ぶことを通して、自然への気付きを得ていることがわかる。

5. 保護者からみた「キトウシこどもの森」での保育を通して感じた子どもの変化

では、「キトキト」での子どもの変化について保護者はどのように感じているのだろうか。ここでは、「変化したとを感じる子どもの様子について」の回答を第4表に示す。

第4表の通り、自分のやりたいこと、他の子がやりたいことをともに聞き合い、その都度、話し合いながらともに考えていく「キトキト」での経験を通して、自然への気付きのみならず、他者との関わり方にも変化があることがわかる。

第4表 保護者からみた「キトキト」での保育を通して感じた子どもの変化

保護者 A	自然の中での小さな変化に気がつくようになり、好奇心が増したように思います。野鳥や木々の変化、虫など、付き合い方の知識も蓄えながら楽しく遊んでいるようです。また、感情表現が豊かになったように感じます。喜怒哀楽を安心して出せるようになった点にも変化を感じます。同時に語彙も増えました。よくおしゃべりするようになってきました。
保護者 B	体力がついた、キトウシの森でのいろいろな知識がついた、仲の良い友達ができ
保護者 C	意見をお友達に伝えられるようになった

(質問紙調査の回答から筆者作成)

V. 「キトウシの森」における東川町立東川第二小学校の取り組み

ここでは、「キトウシの森」における小学校「生活科」の取り組みを明らかにしていく。東川町には小学校が4校あるが、本稿が着目している「キトウシの森」を身近な地域とするのは、東川町の北部に位置する東川町立東川第二小学校である。

1. 東川第二小学校の概要とキトウシの森との関わり

東川第二小学校と「キトウシの森」の関わりは深く、校歌にもある通り“紫雲たなびく岐登牛山”(校歌)は東川第二小学校のシンボリック的存在である(東川町史編纂委員会編, 1995)。東川町史編纂委員会編(1995)によると、東川第二小学校の「特色ある教育活動」として、環境美化活動があげられ、キトウシの森の環境を自分たちの手で守ろうという趣旨から、低学年は学校から富山神社までの道路沿い、中学年はケビン付近、高学年はスキー場一体と活動場所を分けて実施され、身近な地域であるキトウシの森との関わりの中で、児童が自ら考えて取り組むことが大切にされてきた。

また、「キトウシ探検隊」として、地域の史跡や文化財を訪れる活動もなされていた(記念誌編集部, 1999)。記念誌編集部(1999)によると、東川第二小学校の児童は

春と秋に「キトウシ探検隊」として出発し、水田発祥の地、富山神社、岐登牛の歌碑、開拓記念碑、幌倉沼遺跡、懐郷往来之碑、菅沼農場馬頭観世音など、身近な地域の文化財や芸術的な作品にふれ、地域を学ぶ取り組みを行っていた。

授業での「キトウシの森」の活用のしやすさとして、教員 A は聞き取り調査の中で「教科書に掲載されているような虫探しの虫や木の実やどんぐりもいろいろな種類を見たり集めたりできる」点を挙げていた。また、教員 B の回答からは、「キトウシの森」での活動として、小学3年生「社会」において「東川の町の様子を高い場所から見る」ことや、「総合的な学習の時間」における「写真活動」を行うことが示された。「キトウシの森」以外の身近な地域においても「理科の四季と生き物」や「総合的な学習の時間」で実践がなされており、東川第二小学校では継続的に「キトウシの森」や身近な地域において自然体験活動が行われていることがわかる。

2. 教員からみた自然体験活動を取り入れた授業を通した児童への期待

では、自然体験活動を通して教員は児童にどのようなことを期待しているのだろうか。第5表は、教員からみた児童への期待についての回答である。それぞれの回答からは、自然との関わる中で、自然の変化の気付きや故郷への愛着を持つこと、また、各教科等につながる学びを得ることが期待されていることがわかる。

第5表 教員からみた自然体験活動を取り入れた授業を通した児童への期待

教員 A	虫とか動物じゃなくて、スパンと入っていて、さっき言ったように、自分も家族いるように、虫にも家族がいたり、友だちがいたりって。それを虫だから動物だからじゃなくて、同じように考えられるといいな。あとは、次年度の3・4年生とかになったときに、理科に変わったときに、また虫に興味をもって、観察とか、できればいいのかな。抵抗なく。
教員 B	自然の良さ、厳しさを知る。四季の変化などに気づく。自分の故郷への愛着をもつ。

(聞き取り調査および質問紙調査の回答から筆者作成)

3. 東川第二小学校の小学3～6年生からみたキトウシの森での活動

ここでは、東川第二小学校の小学3～6年生への質問紙調査の結果をもとに、児童からみた「キトウシの森」での活動を明らかにする。まず、キトウシの森に行ったことがあるかどうかについては、全員が「ある」と回答し、児童にとって身近な地域の自然環境としてキトウシの森が位置づいていることがわかる。

そこで次に、キトウシの森での活動について、「どのような機会に、どのような活動をしたのか」について尋ねた。回答の結果は第6表の通りである。幼稚園や保育園、また家族や友だちとキトウシの森で過ごす場合は、ジャブジャブ池で遊んだり、キャンプをしたり、という回答がみられる。授業としては「総合的な学習の時間で写真を撮りに行った」と回答している児童が多いことがわかる。

第6表 東川第二小学校の小学3～6年生からみたキトウシの森での活動内容

機会	活動内容
幼稚園や保育園で	じゃぶじゃぶ池で遊んだ (4), 遠足で行ってみんなで遊んだ, てん望かくに行った, プライベート, こいにえさをあげた。うさぎにえさをあげた, コテージにとまった, お母さん, さんさく
小学校の授業で	写真を撮りに行った (16), 総合的な学習の時間 (9), 生活 (3), 社会 (2), スキー (2), 水でっぽうをした, 学活
家族で	ジャブジャブ池 (4), キャンプ (3), てんぼうかくを見た (3), 暮らし楽しくフェスティバル (3), スキー (3), 犬の散歩 (2), サッカーをしにいった (2), バーベキュー (2), こいにえさをあげた (2), ゴーカート, 消防団の焼肉, 虫・植物・動物を見に行くこと, キトロン (温泉) にはいる事, 祭り, さくらを見に来たから, フクロウを見るとき, ゴルフ, うさぎにえさをあげた, あそんでたんけん, スキー・妹のチア・遊びに, モルック
友だちと	じゃぶじゃぶ池で遊んだ (5), 遊びに行く, キャンプ, 暮らし楽しくフェスティバル, エビとり, 桜見に行った, サイクリング, おまつりでいっしょに買い物をした
その他	1人で散歩をしました, ほうかご, かよっているばしよ, ジャブジャブ池であそんだ, しんせき, 遊び・スキー

(質問紙調査の回答から筆者作成)

4. 東川第二小学校の「生活科」におけるキトウシの森での実践概要

ここでは、「キトウシの森」の自然環境を活かした実践として「コオロギずかんをつくろう」を取り上げる(写真3)。本実践は、小学1年生「生活科」単元「なかよく なろうね 小さな ともだち」に含まれる実践である。これまで、1年生は東川町内の開拓記念羽衣公園でチョウを見つけたり、学校の裏でカエルやトンボ、チョウを見つけたり、また、コオロギを捕まえたりする経験を授業内外で行ってきた。捕まえた虫は、教室で育てることはせずに、その時間で自然に返すという約束をしてきたが、児童と教員Aとの間で「そろそろ飼いたいね」という話になり、本実践につながった。

「キトウシの森」へはスクールバスで移動した。「キトウシの森」では、リスやどんぐりを見つけたりしながら、コオロギ探しを約1時間30分ほど行った。コオロギを捕まえる際は、一つの虫かごに集め、学校に戻って来てから、それを一人ひとりの虫かごに分けたという。コオロギの飼い方やエサなどは、NHK for Schoolにある動画で確認し、身近な地域の方から藁をもらうなどして、一人ひとり、自らの虫かごの飼育環境を整えた。

本時で使用したワークシート(写真4)にあるコオロギの写真は、児童一人ひとりがそれぞれに撮影したコオロギの写真である。以下、第7表は、「コオロギずかんをつくろう」の学習活動の流れと児童と教員の様子の記録である。本時のあとの授業展開としては、国語「見つけたよ いきものの ひみつ」と連携させ、本時で気付いた点を文章化することが想定されている。

第7表 「コオロギずかんをつくろう」の学習活動の流れ

時間	学習活動	児童の様子
10:10～	本時の課題の確認 「コオロギずかんをつくろう」	・児童一人ひとりが1ケースずつ、コオロギが入った虫かごを自分の机に置く。 ・自分で撮影したコオロギの写真が中央に配置されたプリントに氏名を記入する。
	国語「見つけたよ いきもののひみつ」で学習したことを活用し、コオロギを観察する際の観点を確認する	・教員と児童がともに観察する視点を考え、教員が板書していく「大きさ、いろ、かたち、なきかた、すきなたべもの、すきなあそび、ばしよ、おと、はねのひみつ」
10:15～	コオロギの鳴き方とオスとメスについての観察動画を確認する	・NHK for School「コオロギの鳴くしくみ」「コオロギのおすとめす」を見ながら、自分のケースにいるコオロギをオスとメスに着目しながら観察している ・鳴くコオロギと鳴かないコオロギを手に持ち、動画と自らのコオロギを見比べている
10:24～	ずかんづくり	・コオロギの大きさを消しゴムなどで確認しながら、発見したことや気付いたことを写真に矢印を引きながら記入していく。
10:33～	ずかんづくり 観察と記入	児童が観察し、気付きを記入している間、教員はクラスに配置した図鑑の内容を読み、知識を提示している
10:40～	コオロギの観察動画の確認	児童から確認したいという声があり、観察動画NHK for School「コオロギのたまご～せい虫」「コオロギのエサ」「コオロギのかいかた」を確認した
10:50～	コオロギずかん完成	片付け、コオロギをケースの藁のベッドにもどす

(東川第二小学校での観察をもとに筆者作成)



写真3 コオロギを観察する児童の様子
(2023年9月28日 筆者撮影)

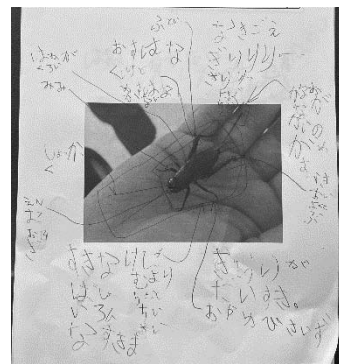


写真4 児童が作成したコオロギ図鑑
(2023年9月28日 筆者撮影)

5. 東川第二小学校の小学3～6年生からみた「キトウシの森」での気付きや学び

では、東川第二小学校の小学3～6年生は「キトウシの森」での自然体験活動を通して、どのような点に気付きや学びを見出しているのだろうか。まず、「キトウシの森」の好きなところとして、以下の回答があった。4つの項目に分けて第8表に示す。

第8表 東川第二小学校の小学3～6年生の児童の「キトウシの森」の好きなところ

項目	好きなところとその理由
動物	ウサギ小屋／自然（理由：色々な動物に会えるから）／ポニーが好きです（理由：ポニーの色がとてもかわいいからです）／うさぎがいるところ（理由：うさぎが好きだから）／ウサギ、魚（理由：かわいい）／どうぶつがいること（理由：たまあにみてかわいいから）
施設	しゃぶしゃぶ池（理由：じゃぶじゃぶ池が楽しいから、水が冷たくて気持ちいい、水が楽しいから）、水遊び／スキー場があるから／きとろん／色んな物があっていい（理由：じゃぶじゃぶ池・スキー・てん望かく・ゴルフがあって楽しいから）
自然	自然豊かなところ／自然がキレイなこと／自然（理由：自然はきれいで好きだから。大切にしたいと思っているから。動物とふれあうことができるから。）／景色が綺麗（理由：夕やけとかが、綺麗だから。）／自然がとてもある（理由：たくさんの種類の木が生えていたり自然かんきょうがととのってる）
その他	ふいんき、いいから。（理由：来るとなんか楽しい気持ちよくなるから）／全体（理由：おまつりをやる時があるから）／ひろい（理由：ひろい）／だれでも自由に遊べる場所（理由：いつでも自由に遊びに行ける）

（質問紙調査の回答から筆者作成）

次に、「キトウシの森」での遊びや活動を通して気づいたことや、学んだことについての回答を以下に示す。

たくさん工夫がされている／記憶力を学んだ／自然の事を知れた／虫の行動／松ぼっくりの形／東川は、さくらがきれい／ストライダーのイベント／？／東川は田んぼがほとんど／ない（2）／植物の大切さ、とてもきれいなこと／色々なことで遊べること／自由にできていい。／うさぎはエサを食べるときにモ、モ、モ、とするのに、魚は口をパクパクする。／たのしい／しぜんのたいせつさ！／時間の大切さ／外で遊ぶと気持ちがよくなる。

児童は、「キトウシの森」のウサギやポニーなど動物への愛着を示すとともに、ジャブジャブ池やきとろんなどの施設、また、「だれでも自由に遊べる場所」と「キトウシの森」の良さを示している。また、虫や動物、東川町の自然への気付きを得るだけでなく、自然の中で過ごすことを通して、自由にできる点や楽しい点を感じるとともに、外での活動がもつ自らにとっての意味についても見出していることがわかる。

VI. 保育士と教員の自然体験活動を行う子どもとの関わり方にみる共通性

ここまで、「キトキト」および東川第二小学校での取り組みの概要を明らかにしてきた。ここまですを踏まえると、「キトキト」では、「キトウシの森」の自然の中で、子ども自身が主体的に関わることや子どもの「やりたいこと」が重視され、自然への気付きのみならず、子ども自身の主体性や生活、人との関わり方への期待が向けられていた。また、東川第二小学校「生活科」においては、自然体験活動を通して、自然そのものの理解や気付きに視点が向けられ、各教科等との関連性や展開を意識し、各教科等の学びにつながっていくことが期待されていたことがわかる。では、保育士と教員は自然体験活動を行う子どもとどのように関わっているのか。「自然の中で遊んでいる子どもや児童との関わり方の工夫や気を付けている点」について、第9表に示す。

第9表からは、保育士と教員が、自然体験活動を行う子どもと関わる際の共通性として、子どもが自由に活動できることを重視している点をあげることができる。保育士および教員においても、自然体験活動の中での自然への気付きに目が向くことが志向されてはいるが、「あまり自分から言い過ぎないように」（保育士C）や「少しでも楽しさを感じてもらうように声かけ」（教員B）など、あくまでも子どもを活動の主体とし、「干渉しすぎない」（保育士B）ことが大切にされている様子がわかる。さらに、「気づきや、面白いを共感していく」（保育士A）や「焦らないで、待つ。見守る」（保育士D）、「こうしましょう」ということは一切しない」（保育士E）、「自由に触ったりさせたい」（教員A）など、子どもが自分自身で意味や楽しさ、気付きを見出していることが尊重されている様子がわかる。

第9表 保育士と教員の自然体験活動を行う子どもとの関わり方にみる共通性

保育士 A	気づきや、面白いを共感していくこと。
保育士 B	干渉しすぎない
保育士 C	草木や虫などに目をいくように自分から発信しています。でもあまり自分から言い過ぎないように。
保育士 D	見守って、本当にもう命に関わるとか、そういうときだったら「ワーン」てなるけど、基本は子どもたち同士の姿とか、子どもがなにか「ん〜」ってなっているところも「いや〜」じゃなくて、「ん〜」ってなってるなって、ずっと見ていて。「ん〜」ってなってるところの裏はなんなんだろうっていうのを、汲み取りたいなって思ってた。やっぱりなんか、出ない部分が一番大事っていうか。ずっとここできつとぐるぐるぐるぐるしてて、ここでもぐるぐるぐるぐるしてて、それはやっぱり受け止めてもらってとか、聞いてもらって、本当の力が発揮できると思うので。受け止めてもらえる土台があつての力の発揮だと思ってる。なんか焦らないで、待つ。見守る。
保育士 E	さっきから伝えてると思うんですけど、やっぱり主体的な考えをもってもらえるように促していきたいので、「こうしましょう」ということは一切しないです。本当に立場は一緒。大人も子ども一人の人間として対等であるというのは心がけています。それはもうたぶんこの理念でもありますし、「子ども」というので大人が押し付けたくないんですよね。やっぱり子どもにも権利がありますし、子どもの権利を守っていききたいなって思っているのので、「一その子どもの意見」としてだけではなく、一人の人の意見として聞き入れるっていうことを、立場をとって、ここはみんなそうしてると思います。
教員 A	結構、男の子4人なんだけど、虫が好きで、だからいろんなものを触って、興味あるんだけど、もう自由に触ったりさせたいなって。気持ち悪いとか、怖いとかっていうふうなのではなく。なるべく大人も平気な顔して。私苦手なんですけど。平気な顔して、かな。あとは自分たちと同じだよって。生きてるから、たしかにかわいくて、ほしくて、買いたくて、置いておきたくてあるんだけど、必ず次の日には返してあげようっていう約束だったんですよね。ただ、この間、学校の前で捕まえた4匹捕まえたのがいて、ちっちゃいのが一匹死んじゃったんですよね。それも頭にあるから、今日もどうするんだろうってドキドキしてて。「明日返すっていう約束だから」って。じゃあ、みんな返すって感じですか？「そうだね」って。「山に返すの？」って言ったら、「山にはちょっと返しに行けないから、ちょっとお友だちのいる原っぱに返してあげようか」っていう感じで。
教員 B	虫が嫌いな子などもあるので、マイナスイメージだけでなく、少しでも楽しさを感じてもらうように声かけ。ふりかえり。

（聞き取り調査および質問紙調査の回答から筆者作成）

VII. おわりに

本稿の目的は、身近な地域における自然体験活動にみる幼保小の共通性を明らかにすることであった。本稿では、「キトウシの森」を拠点に、「キトキト」および東川第二小学校での自然体験活動の取り組みを記述したうえで、保育士と教員が、自然体験活動を行う子どもと関わる際の共通性として、子どもが自由に活動できることを重視している点を明らかにした。つまり、保育士と教員はともに、子どもの自然体験活動において、自然の中で自由に活動できることを尊重している、ということである。このことは、東川第二小学校の小学3～6年生からみた「キトウシの森」での気付きや学びにも示されており、「自由にできていい」など、小学校での活動の中でも児童にとって「キトウシの森」での活動は、自由であると受け取られている様子がわかる。その一方で、東川第二小学校以外の他の小学校に進学した卒園児Bは、「キトウシの森」での遊び方や活動の仕方について、「キトキト」と「小学校」での違いはどんなところにありますか」という質問に対し、「自由な所(学校では決まっている事しかできない)」

(卒園児B)と回答している。このことはつまり、保育士および教員にとっても自然体験活動において子どもたちが自由に活動することが重視されているにもかかわらず、これまで、「森のようちえん」「キトキト」という自然の中で過ごしてきた経験を有する卒園児にとっては、小学校での自然体験活動は「学校では決まっていることしかできない、自由ではない」と受け取られている可能性があるということを示している。

では、「森のようちえん」において子どもは自然の中でどのように過ごし、大人はどのような関わり方をしているのだろうか。本稿では紙幅の都合上、詳細な記述を行うことができなかったが、「架け橋期に園の先生が行っている環境の構成や子供への関わり方に関する工夫が見える化し、家庭や地域にも普及」(中央教育審議会初等中等教育分科会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」2022, p.10)させていくためにも、今後は、「森のようちえん」における自然の中での活動や子どもの捉え方、また、安全面での工夫などの観点から、より詳細に子どもと大人のやりとりを記述および分析することで、自然体験活動における保育士と教員の共通性を活かした幼保小の連続性や連携が担保されるような教育実践につながっていくことが考えられる。今後の課題とする。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、「キトウシこどもの森」の園児のみなさん、先生方、卒園児や保護者の方々、また、東川町立東川第二小学校の児童のみなさんと先生方に多大なるご協力を賜りました。誠にありがとうございました。身近な地域の自然環境の中で子どもが遊び、学ぶとき、大人にできることはなにか。園児や児童のみなさん、先生方の姿から、とても多くの学びを得ることができました。心より御礼申し上げます。

文献

- 荒井一洋（2016）：自然に学び自分は育つ。自分は育ち自然を残す。写真文化首都「写真の町」東川町編『東川町ものがたり一町の「人」があなたを魅了するー』，新評論，p.180.
- キトウシこどもの森（2023）：重要事項説明書 キトキトのしおり 2023 年度 4 月改訂版。キトウシこどもの森
- 木戸啓絵（2017）：幼小接続期と幼児教育の意義：森のようちえんの保護者および保育者の意識調査より。教育研究，61，pp.69-85.
- 記念誌編集部（1999）：『岐登牛に輝いて 確かな歩み 百年東川第二小学校開校百周年記念誌』東川第二小学校開校百周年記念協賛会
- 教育委員会（2016）：教育環境。写真文化首都「写真の町」東川町編『東川町ものがたり一町の「人」があなたを魅了するー』，新評論，pp.153-179.
- 小林祐一（2023）：幼少期における自然体験に関する実態調査と幼保小の接続に関する考察。山梨学院短期大学研究紀要，(43)，pp.56-64.
- 写真文化首都「写真の町」東川町編（2019）：東川町 第 3 巻。
<https://town.higashikawa.hokkaido.jp/special/town-history/pdf/town-history-vol3-1-all.pdf>（最終閲覧日：2024 年 1 月 24 日）
- 中央教育審議会初等中等教育分科会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」（2022）：幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）。
https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf（最終閲覧日：2024 年 1 月 24 日）
- 東川振興公社（2023）：『キトウシ森林公園家族旅行村』施設名称変更について。
<https://www.kazokuryokoumura.jp/category/info/>（最終閲覧日：2024 年 1 月 24 日）
- 東川町郷土史編集委員会編（1994）：『郷土史 ふるさと東川 IV 資料編』東川町。
- 東川町史編纂委員会編（1995）：『東川町史 第 2 巻』東川町。
- 東川町編（1972）：『第二次まちづくり五カ年計画書』東川町。
- 柳原高文（2020）：「生活科」の「気付き」と「森のようちえん」との関わり。社会保育実践研究，4，pp.1-7.
- NPO 法人大雪山自然学校（2022）：HIGASHIKAWA キトウシおさんぽ MAP～夏編～。NPO 法人大雪山自然学校